カミュ『異邦人』における「無関心」

鈴　木　忠　士

第Ⅴ章　自然的世界
　予備的考察
　1　生と死の弁証法
　2　死の願望と死の不安
　　A．ムルソオの身体像
　　B．異形の身体
　　C．生命的身体
　　D．共生的身体
　　E．メランコリー (1)……（以上，前号まで）
　　(2)……（本号）

第Ⅴ章　自然的世界

2　死の願望と死の不安

E．メランコリー (2)

さて，以上の次第からして，レエモンも又合体願望と共生的な対象関係をその性格特徴としており，その限りムルソオと同じ心性の持主なのであると言ってよかろうし，ムルソオが「内攻的な性格と人々の眼に映っている」(291) (96) のに対して「絶えず冗談を言い続け」(73) るというように，陰と陽の違いはあるが，彼はムルソオの分身なのであると言えよう。社長が転勤を勧めたときにはすげない態度を取りながら，レエモンに対しては「満足させるように専心した」(50) というのも，夙にムルソオがレエモンのうちに自分と同じ心性を見抜いていた

からであり，一体感幻想の相方に仕立て上げようとするからなのである。だからこそムルソオのレエモンに対する態度は限りなく受容的なのであって，警官の前で「慄えている」(57) 姿を見られて「男」(46) を下げたと感じているレエモンに「何も期待していなかった。それに巡査は好かないのだ」と言って「満足」(58) を与えるのであるし，そうした慰撫を「仲間」としてのものと受けとったレエモンが「しばらく黙って」(57) 示していた当初の遠慮はどこへやら，彼「のために証人として立たなくてはならない（傍点は鈴木，以下同じ）」と最早依頼すべきこととしてではなく「仕事」(58) の「仲間」へつまり「共犯者」(136) へ当然要求すべきこととして警察での証言を迫ってきたときも，ムルソオは「どうでもいい」とは言いながらも結局「承諾した」(58) のである。この「純粋な迎合」(135) がレエモンをいたく「満足」させ，かくして「情緒的に自他一致の状態」が醸成され，ムルソオ自身が又そこに「満足」を見出すに至るという心理過程は次の一節に明らかであろう。「彼〔レエモン〕は自分の女を罰することに成功してどんなに満足かを僕に語った。彼は大変僕に親切だった。これは楽しいひとときだ，と僕は思った。」(59)　ただ，一方での捨我的他方での執我的な同一化に拠る一体感はいずれ彼我における我執としての個体性に出会わざるを得ない。所詮一時的なものという予感が「ひととき」という言葉に表われている。

仮構された一体感は傷つき易い。それは些細な事実を前にして微妙に揺らぎ出す。犯行当日の朝レエモンの姿を見て「彼の前腕が真白で黒い毛におおわれているのが，僕には少し厭だった」(72) とムルソオが言うのも，既述の如く異形の身体は彼の脆弱な身体概念を動揺させて死の不安を喚起するからなのであり，レエモンとの間に働いている同一視によってこの不安が一層強められるからなのであるが，しかし又自分の「日に灼けている」(33) 肌と相手の「真白」な肌との相異が一体感幻想に衝激を与えたからなのでもあるのだ。

その日の昼食後，一緒に散歩に出たときムルソオは言う，「はじめ，レエモンとマソンは僕の知らない事柄や人々の噂をした。彼等が長い間の知り合いで，

一時は一緒に生活したことさえあるのがわかった」(79) と。振り返って見れば，養老院において，理性では母の「新しい生活」(125) を許しているつもりなのだが，彼の感情は母の死を悼んで泣く「知らない」(19) 女や「許婚」(23) の存在に耐ええないことを示していた。他者が個体性を主張するのは当然のことであるが，その限り他者の生活のうちには自分に未知の部分が必然的に生じてくる。この未知の部分によって自他が隔てられることを恐れるとすれば，人はその存在を意識から予め排除しておこうとするだろう。だからマリーが「用事」でムルソオと別れるとき「あたしが何の用だか知りたくないの」と尋ねると，彼は「勿論知りたい，しかし僕はそれを思いつかなかった」(66) と言うのである。一方において，個体性の主張がある限り自他の人生の完全な「一致」(76) は原理的に不可能であるという認識はあるのだが，他方において，人は他者の人生の一切を「知りたい」と思うのであり，共生的人間の合体欲求とはこの「不可能への欲求」(292) なのである。ここに必至の幻滅と一体感幻想の破綻を免れたければ，いっそ何も知らないままでいるのが最善の策なのであり，この無意識の抑制故にムルソオは「思いつかなかった」のであった。レエモンに対しても同じ心理が働いていた筈である。だからレエモンの人生の「知らない」部分の存在を如実に示されて，ムルソオの一体感幻想は動揺を受けないではいないのである。レエモンにとってマソンが「長い間の知り合い」でしかも「一緒に生活したことさえある」ほどの「仲間」であるとすると，ムルソオは「ひとりの本当の仲間 (un vrai copain)」(51) にすぎないと悟らざるを得ないのだ。

結局，母が「許婚」をつくることによって，マリーが「変っていて，そのために多分愛しているが，いつか同じ理由で嫌いになるだろう」(65) と言うことによってムルソオに理解させたように，生身の女性との一体感は当てにできない。そこからマリーを匿名の生命的身体に還元しようとする防衛的な態度も生ずる。しかし，「男同士の間」(52) とて同じことなのだ。ムルソオはレエモンとマソンの形作る「内」から弾き出され自分を「遺棄」されたと感じた筈である。だから彼が「僕は帽子無しの頭に日光をうけて半分眠っていたので何も考

えなかった (Je ne pensais à rien)」(79) と言うとき，マリーの生活の未知の部分を「知りたいが，それを思いつかなかった (je n'y avais pas pensé)」と言ったときとまったく同じ様に，一体感幻想を阻害する現実を自分の意識から排除しようとする防衛的な心理の働きをそこに見て取らなければならないのである。

愛の対象（母）の喪失への正常な心的反応としての悲哀から新しい愛の対象（マリー，レエモン）への情愛的関与への移行の試みはこのようにして頓挫する。というのも，新しい対象への情愛的関与と見えたものは躁的防衛にすぎず，悲哀と見えたものの実態はメランコリーであったからだ。ムルソオは女性（マリー）を対象としては相手を母親代理とし，男性（レエモン）を対象としては自らが母親代理となり，母の喪失によって現実には不可能となった母子一体の幻想的関係を再現しようと努めたのであった。

それにしても何故母子一体という幻想的対象関係が執拗に投影され反復されなければならないのか。そして何故そうした試みは挫折せざるを得ないのだろうか。共生的人間が止み難く癒されたいと願う一体感の負った傷とは，まさに己が母から蒙った（と少なくとも自らは信じている）傷手なのであり，それ故癒えることのありえない根源的な体験なのである。幼児期における生の本能（エロス）の個体性と統合性への分化発展にとって必須の前提となる根源的一体感の成立が阻害を受けることは，その生そのものを否定されることであるから，自己愛的自己保存の衝動を充分に備えている幼児ならばこの根源的現実を否認することによって生の本能を展開させていこうとするだろう。このように現実否認の心理機制をその人生の出発に当たってその生そのものを可能とするために必要とした人間が共生的人間と呼ばれるのである。

一次的な母子一体感の欠如を補うものとして防衛的で二次的な一体感が仮構され，個体性への本能的欲求はこの幻想的一体感を破綻させるものとして忌避されることになる。これ以降，すべての対象関係を産出する統合への欲求は合体への欲求に転化するわけである。人間の生の本能がそもそも対象志向的であ

るのだから，この合体を志向する対象関係も時と所を選ばず再生産されるのであり，又その目標の幻想故に現実との接触による破綻は不可避であり，根源的な分離不安が蘇らざるを得ないのである。結局共生的人間にとって「逃げ路はない」(116) のだ。すべての幻想的対象関係の仮構は足掻きであり，無益な「労苦」(85) にすぎず，「遺棄」という根源的な現実だけがどうしようもなく残ってしまうのだ。

この「遺棄」の状況を既述の如く幼児は母の「怒り」の表われととるのであり，母が幼児にとっては世界そのものであるからには，それは「世界の原初の敵意 (L'hostilité primitive du monde)[293]」と感得される筈である。そして，生の本能のうちの情愛性はそれに呼応し開発を助けてくれる現実的環境を失って撤収されてしまい，対象関係の本来は情愛性と並ぶ必須の契機たる攻撃性は解離して，己が生を根本的に否む世界への「原初の」怒りとして表出されるであろう。環界の「原初の敵意」が「世界」全体の敵意であるなら，それは限界を知らない盲目的な敵意であり，それに対応する幼児の解離した攻撃性も限界を知らないものとなるであろう。先述のように人は人生の発端におけるこうした状況に耐ええず，この「原初の」敵対関係を否定し，「失われた楽園[294]」の幻想に縋ろうとする。だがそれにも拘らずこの根源的な「遺棄」とそれに対応する破壊的衝動の盲目的な開放という原初の体験は，否認されながらも以降の経験様式を決定するのであり，それは「心にとりついて離れない鳥もちのようなもの[295]」となるであろう。前章で指摘した不快な環境刺激を誘因としてしばしば容易に顕在化する，ムルソォの心中における解離した生(なま)の攻撃性の存在は，こうして「世界の原初の敵意」に対する幼児の制約を知らない根源的憤怒の再現なのだと解することができるし，更にこの破壊的攻撃性の活性化が分離不安と相関的である事実は，この生(なま)の攻撃性が原初の「遺棄」に対する制約を知らない怒りの再生であることをよく示していると言うことができよう。

この破壊的攻撃性はそもそも自己愛的自己保存の衝動に基づく自己の生の主張なのであるが，それは又己れの生の展開していく場としての「世界」(母)

を潰滅させ，すべての対象関係の原型としての母子関係を解体するに至る無制約な衝動でもある。従ってその開放は己が生の可能性を自ら断つことであり，自らを破壊することであると言える。根源的「遺棄」の現実があらゆる防衛的幻想の仮構にも拘らず遂に露呈してくるものであると悟られるならば，「労苦」は所詮無益であると感じられるならば，生(なま)の攻撃性の全面的な開放による自己破壊が望まれるであろう。というのも世界との根源的な敵対関係は自己の「怒り」，つまり己が個体性の主張に由来すると観取されるからである。この個体性の主張を原罪として自己を抹殺するならば，それに対応する「世界の原初の敵意」も消失し，「失われた楽園」も蘇るものと思われるのである。結局人は自己破壊のうちに世界との合体，つまりはその生の端緒において夢見て果たせなかった母子合体を実現しようとするのであり，この母子一体こそが共生的人間の生の目標であり「意味」(99) であるからには，共生的人間は生きるために死を選ぶのだと言えよう。

ムルソオ達が浜辺でアラブ人達に遭遇したとき，レエモンに「お前は誰か他のがでてきたらそいつを任すよ」と言われて，ムルソオが言下に「よし」と引き受けたのは，事の成行によるのでもあるが，又レエモンとの間に同一視がなお作動し続けているからだとも言える。しかし既述の如く，その時「焼けつく砂は，今，僕に赤く思われた」(80) のは流血への予感と死の不安の故であり，解離した生(なま)の攻撃性が彼の心の表層にゆらめき出てきたからであった。それを考慮するならば，このとき既にムルソオはマリーやレエモンとの間の一体感幻想の破綻を予感して，もはや「共感的感情高揚」のうちにではなく「攻撃的感情高揚」のうちに「死を忘れ」(296) 分離の不安を没却しようとする方向へと身を滑らせ始めたのだとも言える。

殴られたアラブ人の「血」(80) とりわけ負傷したレエモンの流す「血」(81) は，ムルソオのもつ共感的共生的身体意識とレエモンとの間に働いている同一視が与って，ムルソオを自己自身の死と分離の現実性に直面させる。同時に，レエモンの「傷からの血が口の中で泡を立てた」(81) のを見てその血を己が口

中に感じとり，自己の死即ち自己の個体性の消滅がもたらす「感情高揚」のうちに世界との合体を成就したいという死の願望が湧き起こる。彼の肉眼に映っているのは確かに「血」の予感に慄える「赤い」砂浜なのだが，彼の心の眼はそれと二重映しにあの「世界の原初の敵意」の再燃を見ているのである。そして彼も又原初的体験の反応を我知らず再現する。即ち，先ず情愛的関与を撤収し，防衛的に引き籠る。ムルソオは「女たちに事件の説明をするために残った」が「彼女等に説明するのはいやだった」ので「黙ってしまい，海を眺めながら煙草を喫った」(81-82) のだった。やがて，否定しえない世界の敵意に対し破壊的攻撃性の無制約な開放によって応えようとする。彼が再び浜へ降りるレエモンに「ともかくもついて行った」(82) のはレエモンとの間になお働いている同一視によるとともに，既述のようにムルソオ自身の心中の「血」への渇きがそうさせたのでもある。再びアラブ人達に出会うと，双方が「眼を伏せずに睨み合ったが，ここで全ては海，砂，太陽，笛と泉の二重の沈黙の間で停止していた。僕は，この瞬間撃つことも撃たないこともできる。どっちでも同じことだと思った。」(84) もともとアラブ人達は「レエモンに恨みをもっている」(73) のであるし，ムルソオが「海岸にいたのは偶然の結果」(135) なのだし，手紙の代作をしレエモンに有利な証言をしたとは言え結局のところそれらは「どうでもいい」(58) ことと思われていたのだから，ここでムルソオに「あたりのすべてが殻を閉じてしまったかのように」感じさせ，「眼を伏せずに睨み合」わせる「動機」(146) を求めるとすれば，既述の如くそれは先ず異形の身体をもつアラブ人に対する防衛的な敵意の発動とその反作用としてのレエモンとの同一視の強化のうちに，そしてそれと並んで，アラブ人が象徴する「世界の原初の敵意」に対する無制約の破壊的攻撃性の活性化に求められねばなるまい。この彼の眼底に再び映り始めた「世界の原初の敵意」の故に「すべては海，砂，太陽，笛と泉の二重の沈黙の間で停止していた」と表現されるのであり，その「沈黙」は一触即発の危機を孕んだ嵐の前の静けさなのであり，その「瞬間」とは心中深く抑圧されてきた根源的体験が今まさに再現されようとする瞬間な

のである。だからそれに応える破壊的攻撃性も原初の盲目性に還るのであり，「撃つことも撃たないこともできる」ただ何かそれ自体としては意味のない切っ掛けとなる出来事を待つだけなのだと言われうるのである。

アラブ人達が逃げ出すことによって流血が回避されると，レエモンは「気分が回復したらしく，帰りのバスを話題にし」(84) 平常の心に復した。ところがムルソオはそうではない。彼とレエモンとの間にはもう同一視は働いていないのである。抑圧されていた根源的「遺棄」の現実が露呈するとともにすべての「共感的感情高揚」による防衛機制は効を失して，彼は独り原初の葛藤的状況，原－状況へと滑り落ちていくのである。破壊的攻撃性が自己を肯定し救出するために発現するが，それを全面的に開放することは自己の成立基盤そのものの潰滅に繋がるという葛藤である。人はこの内的葛藤を制御する精神の力を失ったとき狂気に陥るのであろう。狂気，つまり完全な引き籠りは根源的体験の直視を免れさせる。しかし又破壊的衝動の堰を切ることも，この内的葛藤から逃れるもう一つの方途である。これまた無意識の力に自我が屈するという意味で「自我の喪失」であり，「狂気への疾走」(153) に他ならないが，この場合の攻撃性はたとえ妄想的なものにしろ少なくともなんらかの目標をもっており，その限りそれは同時に現実への活路を開くものともなりうる筈である。ムルソオはここでこの両様の狂気への傾向を示している。「階段を上り，そして又女どもと話をする労苦を思って意気沮喪した」というのは引き籠りの反応であり，「ここに止まっているのも，出掛けるのも，結局同じことであった」(84) というのはそれまでの図としての躁的防衛が失効することによって前景化した地としての鬱状況にあって，対象関係を構成する契機としては今は唯一つ残された攻撃性に彼が最後の望みを託そうとしていることを示している。というのも「うつ病における攻撃的心性は〔……〕現実の周囲世界とのかかわり合いの中で障害を来たす抑うつ状態において完全な無力，抑うつ状態にいたる過程での，対他的自己存在としての最終的な確証であり，又，外界の対象との関係を保とうとする志向の最後の形式である」(297) から。

アラブ人達と浜辺で遭遇するまでのムルソオの心理に確認された軽度の抑鬱気分は，流血の光景が一方での躁的防衛を失効させたことによって，その煽りで急激に悪化したのである。そして，軽鬱状態における離人症様の症状が自己防衛の機制であると同時にその現実からの引き籠りの故に妄想的なより重篤な鬱への契機ともなりえたように，ここで彼が陥った抑鬱状況において破壊衝動に闇雲に身を委ねることは逆に引き籠りを免れる方途であるが，その同じ行為がより重篤な鬱の妄想的世界への転落を用意しもするのである。それというのも，そもそもこの破壊的衝動は原－状況の一方の構成者としての母に向けられる筈のものであり，本来の目標に照準を合わせることによって初めてこの攻撃性は真に現実への回路となりうるのであるが，それは原理的に不可能なことだからである。原－状況そのものが「世界の原初の敵意」とそれに対する無制約的な破壊的攻撃性の開放という被害・迫害妄想的な世界なのである。もし幼児にして母と「世界」は別物であり，母の「敵意」は一個の人間の敵意にすぎず「世界」全体の敵意などではないという認識が可能であったならば，彼の原初の体験，原－体験は現実的なものであり，たとえ一度否認されたとしても，それを再び直視することはそのまま現実に還帰することになる筈である。だがこれは不可能な仮定である。もし幼児にそのような認識があればそもそも否認の必要などはないのだし，又幼児は正常の成長過程において必ず母を世界と思い做すものだからである。原－体験が全体的な被害・迫害妄想的体験であればこそ否認される必要があったのであり，又直ちに母と同時に世界との幻想的一体感が仮構される必要があったのである。

このようにして内的現実として再現した原－状況において活路を攻撃性の放出に求めることは，外界からの引き籠りと内的葛藤という二重の分裂状態から自らを救い出す決死の行為であるが，それは絶望的な行為である。というのも原－状況への回帰そのものが現実の生からの撤退なのだが，この原－状況を行為において生きようとすることは，束の間，精神の分裂状態から自己を救うかに見えて，その実，世界の，自らの生の基盤の破壊へと歩を進めることである

からだ。従って，内的葛藤状況に決断をもたらし外向的な破壊衝動に身を委ねること自体が既にして内向的破壊衝動の所産なのだと言えるのである。幻想的一体感こそはこの内・外的破壊衝動の放出を制御していたものであった。つまり生の可能性を拓くものであったのだ。

「暑さがひどくて，空から降ってくる眼の眩むような光の雨の下で身動きせずにいるのは，やはり同じ様に苦痛だった。ここに止まっているのも，出かけるのも，結局同じことであった。暫くして，僕は浜に向かって歩き出した。」(84) ムルソオが階段を上らないのは，現実の生の場から撤退し原－状況に退行していこうとする引き籠りの心理が優勢となったからであるし，心理的「苦痛」よりも肉体的「苦痛」を選びしかもそれに自ら身を晒すように「歩き出した」のは内・外的破壊衝動に身を委ねようとするからであり，自己破壊への願望の故なのである。それ故に，アラブ人達との最初の格闘の寸前に流血の予感から砂浜が「真赤」(80) に見えたように，今又ムルソオは「同じ真っ赤なきらめき」(85) をそこに見るのである。

「僕はゆっくり岩場 (les rochers) に向かって歩きながら，太陽の下で額がふくれるのを感じた。この暑さのすべてが僕にのしかかり，前進を妨げた。その暑い大きな息吹き (souffle) を顔に感じるたびごとに，僕は歯を食いしばり，ズボンのポケットの中で拳を握りしめ，太陽とそこから注がれる不透明な陶酔に打ち克つために全身を緊張させた。」(85)　原－状況への退行と言っても，まったくの妄想的世界に直ちにのめり込んでしまうというわけではない。再生しつつある原－状況の中にあって，人はなお最小限の客観的現実を生きる。破壊的攻撃性はなんらかの対象に向かうが，主体が外的現実に片足を残している限り，その対象は自己ならざる何者かに違いない。ムルソオがここで漠然とではあるが「岩場」の方へ足を向けたことに注意しよう。それは先程の対決のときにアラブ人達がその後に逃れた「大きな岩 (un gros rocher)」(82) のある所であるかどうかは未だ不明である。しかしムルソオがその外的攻撃性の狙いを無意識裡にアラブ人に定めていることは極めて高い確度で推測しうることに思わ

れる。何故なら，つい先刻アラブ人は「撃つことも撃たないこともできる」対象であったからだ。外的な世界の特定の対象を無意識裡にも志向するが故に，ムルソオの破壊への衝迫は彼を闇雲の突進や支離滅裂な狂乱に陥れることなく，その歩みをある方向へ「向」かわせ「前進」させるのである。

主体は外的世界の光景を確かに眼にしながら，しかもそれと二重映しに浮かび上る原－状況を生きる。原－状況とは世界が「原初の敵意」を露にし，主体が己が生を死守するために反撃を企てんとして身構えている状況である。読者がこの内的状況に観点を据えるならば，この砂浜に戻る場面から殺人を犯す瞬間に至るまでの外側から見る限り大袈裟とも言える「宇宙人間視的 (anthropomorphique)」な「古典的隠喩」に充ちた叙述は，心理学的に言えば主人公の知覚の被害妄想的な対象構成は，了解可能なことなのである。世界はムルソオの上「にのしかかり」，死の「ある暗い息吹き (souffle)」(169) が「暑い大きな息吹き」となって彼に吹きつける。世界は彼を圧殺し，「不透明な陶酔」即ち自我の全き喪失としての死の陶酔の中に引き込もうとしている。だから抵抗し，極限において己が個体性を保持するために彼は「全身を緊張させた」のである。だが先に述べたように原－体験の攻撃性を内的に再現しようとすることは，それ自体既に自己破壊の衝動の働きによるとも言えるのであるから，対象世界の被害妄想的相貌は己が外的攻撃性の投影によると同時に内的攻撃性が言わば自ら招き寄せた心像でもある。「緊張」は意識の水準で解すれば「暑さ」のもたらす「不透明な陶酔」への抵抗の表われであり，半ば無意識的な水準では「世界の原初の敵意」に対する反抗なのであって死と分離の不安のうちに解体の危機に瀕する主体が自らの個体性を死守しようとする姿勢なのであるが，無意識のより一層の深みから見れば，それは「世界」という己が生の基盤を相手にしては原理的に「打ち克つ」ことのできないこの闘いにおいて，より徹底して敗北するための挑発であり死の「陶酔」により確実に至らんとする願望の表われなのである。攻撃性は外から内へ，内から外へと容易に反転しうるのみならず，このように同時に外的且つ内的でありうる。死と分離の不安に発動する外的攻

撃性は常に文内的攻撃性即ち死の不安と表裏一体をなしているのである。

「遠くから，例の岩の (du rocher) 小さな黒い塊が，日光と海のしぶきの目も眩むような暈に囲まれているのが見えた。僕は岩陰の冷たい泉のことを考えた。その呟くような水音をまた耳にしたい (retrouver) 欲望，太陽や労苦 (effort) や女達の涙を逃れたい欲望，つまり日陰をその安らぎを又見出し (retrouver) たい欲望に駆られた。しかし，近づいて見るとレエモンの相手が戻ってきていた。〔……〕僕はちょっと驚いた。僕にとっては，それはもう済んだ話で，そのことは考えずにここへ来たのだった。」(85-86) ムルソオは「しかし」と言う。だが先程アラブ人達との対決のときの感情の興奮が鎮まらないまま彼が「砂浜に引き返した」(84) ことを，しかも「岩場へと向かって」きたことを知っている読者は，ムルソオの口から「もう済んだ話」などという言葉を聞かされると「驚い」てしまう。

「遠くから」でも「例の岩」とはっきり断言しうるためには，その岩が特徴的な形をしているか，あるいは浜辺で特徴的な位置を占めているのかのどちらかでなければなるまい。形については「大きな岩」という以上のことは言われていないから，位置が特別なのであって，「岩場」の外れにあるか，あるいはまったく孤立しているか，いずれにしろ少なくとも「岩場 (rochers)」に群がる多くの岩の中の一つであってはなるまい。先刻レエモンと砂浜をこの「岩」まで辿ったときも他の岩のことにはまったく言及されていなかったし，今回ムルソオが独り浜へ踵を返してからこの「例の岩」が見えてくるまで他のどんな岩の存在も気付かれていない。従ってこの「岩」は「岩場」の外れに比較的孤立した位置を占めていると推定するのが妥当であろう。結局彼の足がはっきりと「岩場」へ向かったときも，彼の記憶に確たるイメージとして残っていたのはこの「例の岩」しかなかったのであって，「岩場」を目差すことは即ち「例の岩」を目差すことであったのだ。意識の声が漠然と「岩場」と言うとき，彼の無意識ははっきりと「どこへ自分が行こうとしているか知って」(82) いたと言えよう。

この「例の岩」影を認めたとき，彼がごく自然に「冷たい泉のことを考えた」のは，「岩場」という意識の言葉の陰に「大きな岩」のイメージが潜んでおり，それとともに「小さな泉」(82) とその流れの「微かな物音」(83) を「再び見出したいという欲望」が密かに息衝いていたからである。だがこの「欲望」の陰の更なる暗みにあるのは，「そのことは考えずにここへ来た」という意識の言訳にも拘らず，先程「岩」陰に「見出した (trouvé)」敵(かたき)の「二人のアラブ人」(82) を「また見出し (retrouver) たいという欲望」なのである。

この隠された外向的破壊衝動の陰に読者はなおもう一つの「欲望」を見出す。何故「泉」の「水音」への「欲望」と同時に「太陽や労苦や女達の涙を逃れたい欲望」が語られるのか。それは「労苦や女達」が象徴する一切の外的現実からの，「太陽」との闘いという内的現実からすらもの撤退の，生の一切を「逃れ」て死の「不透明な陶酔」に身を浸したいという「欲望」なのである。この死の願望の観点から振り返って見れば，「泉」の「水の音をまた耳にしたい欲望」が先程とは別様の意味合で了解されよう。この「水」は個体性を溶解する「死の水」[298]なのだ。岩のつくる日陰の「安らぎ」(repos) とは死の安らぎ (le repos de la mort) のことなのだ。そしてこの「安らぎ〔死〕」を「日陰」(ombre) が，「亡霊」(ombre) 即ち怨霊としての母が与えてくれることをムルソオは願っている。つまり原－状況に逆巻く死と分離の不安に耐え切れず，根源的「遺棄」の葛藤状況から「逃れ」るために，死の母に呑み込まれその胎内に還ることが目差されているのだ。その限り確かに「別離や個体性や死を受容できないことの一つの影響は，死の性愛化――生（と別離）が始まる以前の出生前の状態である母親の子宮へ退行しようとする欲求の実現――である」[299]と言えよう。だがこの「人間胎児の子宮内生活」そのものが「あらゆる生物の最初の海中的体験」の「やり直し」[300]であってみれば，「死の性愛化」において真に目差されていることは，あれこれの「母の子宮への退行」に，つまり人間の母の域に止まることなく，母なる自然にまで，「根源的自然，宇宙的自然」[301]にまで至ることによって，母（世界）との葛藤を根源的に超出することなのである。「泉」の

「水」は又絶え間なく湧き続けて休止 (repos) を知らない。「死の水は生の水」[302] でもあるのだ。ムルソオの死の願望が目差すところは，「陰」つまり「昼の死であり，昼の母」である「夜」[303] の下で「生きている者の夜の眠り，死者の眠り，胎児の眠り」を通底する「原初の眠り」[304] としての眠り (repos) を「又見出す」ことなのである。それは又すべての生物の母である自然の中の胎児の「無言の，何も感じない生」[305] でもある。かくしてムルソオにおける死の願望とは又再生の願望でもあるのだ。勿論この場面ではなお第一義的な問題は死の願望であって，再生願望が顕在化しはっきりと彼の口に上るには，自然的「世界の優しい無関心」(171-172) に包まれて「すべてを再び生き直す」(171) ことが語られるためには，遙か物語末尾まで読者は待たなければならないのではあるが。

さて，こうしてムルソオの定かならぬ対象を求めていた破壊的攻撃性は著しく内向したのであったが，「レエモンの相手」を見付けたことによって，今やアラブ人という明確な外的対象を得たことによって，内側に傾いた分だけ反動で外側へ激しく反転する。アラブ人が「すぐに身体をおこしてポケットに手を入れた」のを見て，「僕も，もちろん (naturellement)，上着の中でレエモンのピストルを握りしめた」(86) と言うが，それは確かに先ず防御のための反射的動作であるが，獲物をやっと外部に得た破壊的攻撃性が「ごく自然に」(naturellement) 彼に「ピストルを握りしめ」させたのだと言えよう。

アラブ人は「また仰向けになったが，ポケットから手は出さなかった。」(80) つまり警戒の構えは解かないが自分の方から攻撃する気は無いことをその姿勢で教えたのである。だからムルソオは「自分が後を向きさえすれば，それですむと僕は思った」(86) と言うのだ。この理性的判断の存在は，アラブ人というはっきりとした危険な外的対象に注意力を集中することがつい先刻の太陽との闘争や一瞬前の「泉」の場面における再現した原－状況の被害・迫害妄想的世界から彼を抜け出させる結果になったことを示しているようにも思われる。確かに幾分かはそうなのだが，完全にと言うにはほど遠い。これまで無意識裡に破壊的攻撃性がその対象として朧に象っていた映像が今はっきりと外界に焦点を

結んだのである。想像的対象に現実的対象が重なったとき，束の間の躊躇いの時があるだろう。だから既に我知らず禁断の「悦びに充ち溢れ」(306)ながら逡巡し心の中で背後を振り返って見るのである。「しかし太陽に慄える長い砂浜が，僕の背後を塞いでいた。」(86-87) これは自分自身への言訳にすぎない。彼はこの「太陽」の加える肉体的な「苦痛」を押して「長い砂浜」をここまで辿ってきたのだった。死の危険を冒すことに比べればこの「苦痛」を繰り返すことなど何程のことがあろうか。だがこうした現実的な状況判断は引き返したくないという隠された「欲望」の前にはもはや何の力ももたない。彼が心の中で「背後」を窺ったのは己れすらそれと気付かぬこの隠微な「欲望」の実現を正当化するためと邪魔者の居ないことを確かめるためにすぎない。そして潜在的な破壊衝動の故に先程は「浜に向かって，歩き出した」のだとすれば，今又その故に「泉に向かって何歩か進んだ」のである。「それはママを埋葬した日と同じ太陽だった。そのときのように，ひどく頭が痛くなり，その皮膚の下ですべての血管が一緒に脈を打った。」勿論このように語っているのは語り手としてのムルソオであって語られているムルソオに「同じ太陽」という認識があったとは思えない。語り手はただ埋葬の日の自分の心理状態と犯行直前のそれとの間に暗合があると示唆しているのであろう。埋葬の日の心理状態とは，死と分離の不安及び「遺棄」への怒りと怨霊としての母への恐怖が逆巻く被害・迫害妄想的世界が，母の喪失の否認という機制によって辛うじて意識内へのその奔出を防止されているという状態であった。語られているムルソオはこの犯行直前の場面で無意識のうちに埋葬の日の心的状況に同化し，更にこの心的状況の原型をなしている根源的「遺棄」の状況を我知らず再体験しているのである。「馬鹿気ている」ことが「分っていた」にも拘らず決定的な一歩を踏み出すというのも，再現した原－状況下の破壊的衝動が意識の制御を圧倒していくからに他ならない。

この破壊的攻撃性が全面的に開放されるためには，つまり主体が被害・迫害的妄想世界に完全に落ち込んでしまうためには，未だ「馬鹿気ている」と判断

を下しうるだけの力を残している意識がすっかり失われるか，あるいは少なくとも極度の意識の狭窄が起ればよい。「もう太陽のシンバルを額に感じ，短刀から吹き出す光った剣を眼前にぼんやり感じるだけだった。この燃える剣は僕の睫毛を咬み，痛む眼をかきまわした。」(87-88)　ムルソオの意識のうちには外的世界の具体的対象としてのアラブ人の姿はもはやない。それは「涙と塩のカーテンで眼が見えなくなった」(87) というだけでは説明がつかない。この「カーテン」は死の「不透明な陶酔」の前触れなのであって，意識がこの「カーテン」に覆われるとともに死の不安と死の願望が顕在化し火花を散らして交錯しているのである。攻撃してくるものは，今やアラブ人でもその「短刀」ですらもなく，「燃える剣」なのである。この表象は既に妄想的である。とは言え破壊的攻撃性の対象はなお特定のものであり続けている。しかし次の瞬間においてはもはやそうではない。「すべてがゆらめいたのは，そのときだった。海は濃く熱い息吹きをもたらした。空は真っ二つに裂けて火の雨を降らすかと思われた。」ここで攻撃してくるのは「燃える剣」ですらない。「海」も「空」も「すべて」が「ゆらめいた」，つまり世界がその「原初の敵意」を剝き出しにしその無制約な破壊的攻撃性の堰を切って落したのである。主体の側から言えば，被害・迫害妄想的原－状況が開示された瞬間をその「全存在」によって生きているのである。だから炸裂する「世界の原初の敵意」に対して直ちにムルソオが「全存在を緊張させ，手をピストルの上にひきつらせた」のも当然と言える。それは主体を抹殺せんとする世界に対する主体の「原初の」怒りの爆発である。主体はこのように内的現実の脈絡を正しく辿っているとは言え，外側から見ればこの状態は精神錯乱と言う他ない。だからその怒りの爆発は闇雲のものであってもよい筈である。

この「狂気への疾走」と自爆からムルソオを救ったものは僅かとは言えその働きを残していた意識の存在である。この意識が「ピストルの上に引きつ」る「手」を知覚し，「引き金」を知覚し，「銃尾の滑らかな腹」を知覚し，誤り無くアラブ人が倒れたからには「燃える剣」に銃口を向けさせたのである。意識

の残存をこのように想定しなければ，犯行後忽ち平静に返って「汗と太陽を振り払」って見ることなど思いもつかないであろうし，況んや「僕は日盛りの均衡を，自分が幸福であった浜辺の類のない静寂を破壊してしまったことを理解した」りする余裕など到底生まれてくる筈もない。意識はやはり「燃える剣」の背後になおひとりの人間の姿を朧に象っていたのであろう。だからこそ事の結果を見定めようとして「汗と太陽を振り払った」のだし，そこに「身動きしない一つの身体」(88) が横たわっているのを目にしても「驚いた」(86) りはしないのだ。ムルソオの破壊的攻撃性は，錯乱状態にあったにも拘らず，いやむしろそれ故にこそ，僅かに残された意識の力によって，外的世界への唯一つ残された戸口としての「一つの身体」に向けられていたのである。

こうした意識の残存とその主体を救出しようとする働きに注目する限りにおいては，ムルソオの殺人行為に，被害・迫害妄想的限界状況下にあって「他人にそれを移しかえることによって，自分自身の死と自分自身の解体からのがれるという殺人の呪術的意味」[307]を認めることもできようし，「共感的感情高揚」がその効力を失ったと悟ったムルソオが「攻撃的感情高揚」の中で「死を忘れ」[308]ようとしたのだとも言えるだろうし，「殺人とは，単なる殺すことの欲望の満足〔……〕ばかりではなくして，人間を殺すことの満足，つまり，誰かを破滅させることによって自己を確認することの満足なのである。〔……〕自己の個体性の絶対的確認が他者の個体性の絶対的破壊をよぶのである」[309]とするならば，再現した原－状況下にあって自己解体の危機に瀕していたムルソオは殺人という「自己の個体性の絶対的確認」によって自己を救出し自我感情の高揚を味わったのだと言うこともできよう。更に，決定稿においては削除されたが草稿段階においては認められる，犯行の瞬間にムルソオの全身が浸される「悦び」[310]を考慮してよいならば，ムルソオはここで精神病理学的殺人者が殺人行為の瞬間に覚えることがあるとされている「血の陶酔」即ち「視野が狭窄したような印象をもち，被害者の熱い血の臭いを感じて，恐怖や心配をおぼえるかわりに，優越感と快感を体験」[311]したのであると，殺人行為のうちに全能感に充ち

た「個体性の絶対的確認」の体験をしたのであるとすらも言えることになろう。

だが，既にこれまでに見てきたように，ムルソオの破壊的攻撃性は外から内へ，内から外へと反転を重ねてきたのであり，原理的に「打ち克つ」ことのできない闘いに根をもつ攻撃性であるが故にそれは畢竟自己破壊を結果しないではいないのである。アラブ人を発見する直前の彼の心境に認められた変転はそれを如実に示していた。従って「自己攻撃性の強いものは一般に外的攻撃性が強いとか，また，殺人が行われた時点においては，たとえ現実の自殺企図はなかったとしても，活発な自殺病相期にあったと考えられる場合が多い[312]」という観察は，この場合にも当て嵌まるとしてよいであろう。ムルソオの犯行は「間接自殺」であるという前節末尾で提出した推定は，ここに一つの根拠を得たと言ってよかろう。

犯行直後のムルソオが示すいかにも「平静（calme）」(127) に見える態度はどのように解釈されうるであろうか。鬱病患者の犯す殺人は「絶えがたい緊張状態の解決としての暴力行為」と看做しうる場合があると言われている。即ち，「妄想性思考の内容を重視するだけでなく，情動的緊張の圧力に対しても十分注意すべきであり，多くの専門家は，時折殺人的激発に引き続いて起る平穏な状態が印象的であった，と述べている[313]」というわけである。拙論は，砂浜に引き返すところから犯行に及ぶまでのムルソオの活発な「妄想性思考」を辿ってきた。しかし彼の思考のこの「妄想性」というものは，読者が分析によって導き出した結論なのであって，語られるムルソオにおいては勿論，語り手においても意識されているのは明らかに専ら「情動的緊張」なのであり，既に見たようにムルソオ自身が自分の「全存在」の「緊張」を語っているのである。鬱病者にあっても己れの思考の「妄想性」は自覚されず，専ら耐え難い「情動的緊張」のみが意識されていることであろう。犯行後においても又そうであるだろう。何故なら，もし己れの「妄想性思考の内容」が自覚されたならば，たとえ「表面上[314]」のものであろうと「平穏な状態」に安閑としていることはできな

かろうからである。ただ「情動的緊張」とそれからの解放のみが意識されているにすぎないのである。

だが，鬱病における「実際に攻撃の現われる精神・心理過程を問題とする場合には，不安，緊張といった情動面と，くやしさ，うらみ，憎しみといった敵意，攻撃的心情面の二面を考えなければならないであろう。前者の不安，緊張，苦悶，焦躁の激しい場合には情動の激発として，古くからメランコリーの激越発作 raptus melancholicus が知られている。この種の情動的緊張は，それ自体でも攻撃的行為となりうるが，それらの情動的緊張が，うらみ，憎しみといった心情面をよりかきたて，あるいは相互に強め合うことによって，より激しい敵意，攻撃性が生ずるのである(315)」とするならば，「情動面」のみならず「心情面」をも考慮に入れようとするならば，ムルソオの場合が丁度そうであるように鬱病者にあって犯行前後の情動的緊張とそれからの解放以外に意識されていないとすると，そこには語られざる「心情面」がありうると言えるわけであり，強力な現実否認の機制が働いていることが推定されうるわけである。鬱病者の場合にも情動の緊張からの解放はそれ自体一つの快感である筈であり，情動的緊張の「圧力」に「打ち克つ」ための攻撃性の放出は優越感に充ちた「悦び」をもたらした筈であるが，そうした快の記憶を意識に上せることはそれと同時に対象の破壊とそれによる自己の破滅の事実を意識化することに繋がるのであるから，犯罪というのっぴきならない現実に直面することを避けるべく快の体験も又否認されるわけであろう。犯行後の「平穏」とはこのような徹底した現実否認の所産であろう。こうした見方は犯罪心理学の立場からも支持されるように思われる。小木によれば，「犯行直後には，普通の場合，急性感情麻痺と考えられる茫然自失ないし冷静な状態がみられる。〔……〕殺人後の感情麻痺は，殺人犯の情性欠如ないし粗暴な素因によるものであるとは結論できないのである。この現象は犯罪そのものに原因する直接的結果なのである。彼がその残忍な行為を意識したならば，彼は自分が招いた結果に突然にまた全面的に打ちのめされ，彼の情動は石化されてしまうのである。これは本能的な防衛機

制であって，彼の本能にとっては一種の安全弁であり，その外面的な鈍感さが，現実の困難な問題から彼を守っているわけなのである。(316)」

この「防衛機制」としての現実否認の観点に立って，「僕は日盛りの均衡を，自分が幸福であった浜辺の類のない静寂を破壊してしまったのを理解した」とムルソオが言うとき，彼の言う「理解」が果たしている役割がよく分る。彼が「理解した」つまり意識したのは，「均衡」と「静寂」の「破壊」であって，「ひとりの人間」(92) を「破壊してしまった」という事実ではない。殺人行為は否認され，彼の心に浮かんでいるのは，遂に「均衡」と「静寂」の生活が終わりを告げたこととおそらくは自分の運命を決する「すべてが始まった」という漠たる自覚だけであるだろう。彼は続けて，「そこで僕は身動きしない身体になお四発撃った。弾丸は，跡を見せずに，食い込んだ。恰も不幸の扉を叩く四つの短い音のように」(88) と言っているが，彼自ら言う通り彼が終始自分の犯行に「後悔」(101) を覚えることがなかったとするならば，この「不幸」とは罪を犯したことをではなく，免れない刑罰のことを示していることになる。刑罰，おそらくそれは犯行直後の彼の脳裏を一刹那よぎった想念に相違ない。それ故犯罪の事実は否認されるのである。そして，否認の後に残る漠然とした不安だけが意識され，それが「不幸」と呼ばれているのである。

否認の機制が成り立っているからこそ，犠牲者はつい先程までムルソオの眼前に個体性を主張していたアラブ人としてではなく単に「ひとつの身動きしない身体」(un corps inerte) として，更に「一つの生気なき物体」(un corps inerte) として表象されたのである。実存としてのアラブ人の姿は幻のように消え失せて，眼前に転がっているのは「一つ」の，名も無い身体＝物体にすぎない。これは確かに自分の所業なのかと目を遣るムルソオの訝し気な様子が見えてこよう。

身体＝物体という表象は既述のように死と分離の不安の否認から生じたものでもある。「ふつうの子供は，五歳までは，死についてただぼんやりした観念しかもっていないという。〔……〕動く物はすべて，子供にとっては生きているよ

うに見える。〔……〕子供は，動かない物は，生きていないとか死んでいるとして分類する。〔……〕子供は，死んだものは適当な処置によって再び生き返ると想像する[317]」と言われている。又「どんな男も，死によって小児化され，母親にしがみつくものだ[318]」とも言われている。既述の如く，ムルソオは母の喪失に際して「小児化」し，怨霊として蘇る母に悩まされた。今問題にしている犯行の場面においても，彼の意識の深層に抑圧されていた原－状況の復活という心理的退行現象が認められた。従って「小児化」しているムルソオは，死を「身動きしない」ということとしてとらえ，本当に動かないのかどうか確かめようとして，ひょっとしたら衝撃で生き返るのではないかとも思って，なお四発の弾丸を，つまり弾倉に残された弾丸のすべてを機械的に撃ち込んでみたのである。

以上の次第で，ムルソオのうちに鬱滞する破壊的攻撃性は錯乱と混沌の中で自己破壊へと彼を導く筈のものであったが，アラブ人という対象を外界に得ることによって外部へと反転し放出されたのである。と同時に彼は死の不安とそれと表裏のこととしての死の願望からも逃れることができたのである。その意味では語り手の主張にも拘らず，語られるムルソオはむしろ心の「均衡」を得たのであり，「幸福」を得たとも言えるのである。本章の「予備的考察」で明らかにしたように，ムルソオは己れの人生の総括，つまり「再提示」にあたって常に正確であるというわけではない。今の場合においても，前節で明らかになったことに照してみれば，彼のこれまでの生活が「均衡」を保ち「幸福」であったとは必ずしも言い難いし，その著しく「不幸」な側面を本節は仔細に吟味してきたのであった。

とは言え，この「均衡」も「幸福」も仮初の，「平面上」の「平穏」に，小康状態にすぎない。「心情面」が否認されている限り，事態はなんら根本的に解決されていないのであるから，再び「情動的緊張」の昂まりとともに破壊的攻撃性が発動されるであろう。読者はその一つの証を，物語最終章においてムルソオが司祭に示す激昂に，「大きな怒り」(172) に認めることになるであろう。

〔注〕（第2節つづき）

(291) 引用文に直続する（　）内の数字は以下のテクストの頁数を示す。Albert Camus: *L'Etranger*, Gallimard, 1942.

(292) 『創作集』, p. 15.

(293)-(294) 『神話』, p. 28.

(295) Albert Camus, Carnets I, Gallimard, 1962, p. 15. 以下『手帳 I』と略記する。

(296) モラン，前掲書，p. 78.

(297) 茂田優『うつ病の攻撃性』，原俊夫・鹿野達男編『攻撃性』所収，岩崎学術出版社，p. 97.

(298) モラン，前掲書，p. 135.

(299) ブラウン，前掲書，p. 123.

(300) モラン，前掲書，p. 137.

(301) 同書，p. 136.

(302) 同書，p. 135.

(303) 同書，p. 134.

(304) 同書，p. 133.

(305) 同書，p. 137.

(306) 『創作集』，p. 1924.〔p. 1168. の注。〕

(307) モラン，前掲書，p. 69.

(308) 同書，p. 78.

(309) 同書，p. 67.

(310) 注(306)参照。

(311) 小木，前掲書，pp. 69-70.

(312) 茂田，前掲書，p. 86. 但し，これは茂田の紹介による J. G. Batt の見解である。

(313) 同書，p. 89.

(314) 同書，p. 90.

(315) 同書，pp. 109-110.

(316) 小木，前掲書，pp. 70-71.

(317) フィッシャー，前掲書，pp. 231-232.

(318) モラン，前掲書，p. 128.